

ナポレオンの「記憶」試論

——ルーアンにおける皇帝騎馬像をめぐる——

竹 中 幸 史

【要約】 本稿は、これまで研究の手薄であつた地方都市におけるナポレオン伝説の受容を、ノルマンディーの首邑ルーアンを対象に分析する。特に市役所広場に建つナポレオン一世の騎馬像にこめられた市民の「記憶」を中心に取り上げる。ナポレオンは一八〇二年、一〇年と二度ルーアンを訪れたが、これによって市民は彼を戦勝と平和、経済繁栄をもたらす英雄として記憶し、帝政崩壊後もその人氣が一掃されることはなかった。そして四〇年の「遺骸の帰還」に加え、ナポレオンによつて開始された都市改造が旧市街を活性化したこともあつて、都市の発展と彼の事績を重ね合わせる記憶が増幅されていった。こうして皇帝崇拜が高まるなか六五年、騎馬像は建造されたのだが、そこには政府による国民統合と共に、不況にあえぐ市民たちのナポレオン一世賛美、換言すれば自由帝政の見直しを迫る名士層の意思が表象されていたのである。そしてその後もナポレオン一世の記憶に仮託して名士のアピールが繰り返されたことは、その来訪が六〇年余の長きにわたつて集合的記憶に作用したことを示している。

史料 九一卷一号 二〇〇八年一月

はじめに

ナポレオン三世の興した第二帝政の存立が、市民や民衆のナポレオン一世にまつわる「記憶」、すなわちナポレオン伝説に大きく拠っていたことは、つとに指摘されてきた。この伝説は西川長夫が指摘したように、その起源を近世以前にも

たず、またナポレオンその人が伝説形成の一翼を担った政治的プロパガンダの特徴を備えているという点で、近代的な「伝説」ということができよう。^①しかしその伝説は単なる昔話ではなく、その作用の幾分かは今日でも生きている。たとえばナポレオンの大陸支配、経済体制がヨーロッパ連合の先駆であるという言説は今日でも時折聞かれる。そこにはEUを支える近代社会の諸理念を輸出してきたのはフランスであり、その根源は大革命とナポレオンなのだという、「文明化」の先頭を走り続けたがゆえの、いささか無邪気な自負が垣間見られる。^②実際には、服部春彦が示したようにナポレオンの大陸体制はフランス帝国と他国間の支配―従属関係の維持を企図したものであったし、この点でナポレオンの先駆性を認める歴史学研究者はほとんどいない。にもかかわらず、政治家やジャーナリストらによつて語り継がれ、またある程度それが受容されていること自体、伝説の強靱さを示すものであろう。

しかしナポレオン伝説はヨーロッパの統合のシンボルとしてのみ語られてきたのでは無論ない。むしろ伝説は一九世紀から二〇世紀までフランス国民を内向きに統合し続けたイデオロギーであり、その国民性の好戦的な一面を象徴してきたのである。そしてナポレオン没落後の毀誉褒貶も単にナポレオン人気の盛衰を表しているのではなく、人々に彼の伝説がいかに撰取・利用されてきたかを如実に物語る。それゆえナポレオン伝説はフランスにおいて国民的かつ汎ヨーロッパ的であるという二律背反的な特徴を具有しているのであり、国民国家体制の再編成が叫ばれる今日、いっそう重要性を増している研究対象といえよう。

こうした伝説の研究は、一九八〇年代以降多く見られるようになったが、それには近年の歴史学研究における最大の「事件」の一つ、『記憶の場』^④刊行が大きく与っている。集合的記憶を表象するあらゆる場の分析を通じて、フランスの国民意識のあり方に迫ったこの壮大な論集の射程を今、詳しく述べる余裕はない。ただ本稿との関連でいうなら、谷川稔が「言説分析的心性史」と呼んだそのスタイル^⑤は、ある種の方法論上の革新をともなっていた。すなわち事件の起源よりもその受容ないし改竄を重視する歴史学においては、手稿史料だけでなく、従来なら二次史料や「状況証拠」とされたよ

うなものが第一級の史料となりうる。その結果、考察を補う逸話と評価されがちであった「伝説」や口承文化、またモニユメントなどの研究が、人々の認識のありように迫るものとして集合心性史の最前線に踊り出たのである。^⑥

それではナポレオン伝説に関する近年の研究を少し整理しておこう。「記憶」研究に触発されたメナジエは、一九世紀を通じて見られた為政者による伝説の政治利用と民衆による受容について分析し、その上でナポレオン三世による伝説の利用を、メディア、巡幸、八月一五日の祭典とにわけて整理した。^⑦一方、コルバンは『人食いの村』において、民衆による貴族虐殺事件をとりあげながら、暴力と皇帝崇拜の密接な関係、歓喜と殺人の錯綜したイメージの実践について解説している。^⑧さらに両者の示した図式を批判的に摂取しながら、より精緻に考察した実証研究も見られるようになった。コルバンに師事したダリソンはセーヌ＝エ＝マルヌ県の祭典を対象にした学位論文において、第二帝政期の祭典や公式セレモニーのテーマ、組織者、シンボルといった祭りの構造とフォークロアの実践の関わりを詳細に分析したほか、『三色旗、マリアンヌ、皇帝』においては、復古王政から第二帝政までの、革命やナポレオンに関するシンボルの流用について豊富な事例を挙げながら論じている。^⑨

わが国における「伝説」研究について言えば、従軍した兵士の日記や文学作品、なかでもセント＝ヘレナ文学の分析を通じて伝説の起源に迫った井上幸治や、同じく文学テキストを史料としながら、ユゴーらがいかに伝説の形成・流布に関与したかを整理した西川氏の研究は、もはや古典の地位を築いている。また工藤光一は第二帝政期シャンパーニュ地方の農村における祭典を取り上げ、中央からのベクトルと地方の受容のズレないしは共同空間における不協和音という視角を提供した。^⑩杉本淑彦は第一帝政期の「記憶」をも扱い、パリを舞台に様々な図像やモニユメントが伝説の創造に果たした役割を活写してみせたほか、西願広望がセーヌ＝アン＝フエリユール県における伝説の受容の復元を試みている。^⑪

しかしながら第二帝政の支持基盤は農村にあるというのが通説とされてきたこともあって、都市部の研究、特に一つの地方都市に焦点を絞り、伝説の受容Ⅱ「記憶」の変遷を扱った研究はほとんど見られない。そこで本稿ではオート＝ノル

マンデイーの首邑ルーアンを取り上げ、こうした問題について考察を加えたい。というのもルーアンを県庁所在地とするセーヌ＝アン＝フィユール県は、ボナパルティズムの定着という点で、非常に興味深い事例を示しているからである。すなわちメナジェによれば、ブルボン家支配に肯定的なノルマンディー地方にあつて、セーヌ下流やルーアン近郊はその例外、皇帝崇拜の強い地域とされているのである。そしてこのことを象徴的に示すのが、ルーアン市民の寄付によつて一八六五年に完成したナポレオン一世の騎馬像である。

ただし第二帝政期にナポレオンのモニュメントが建てられるのは、それほど珍しいことではない。最もよく知られているのは、六三年、パリのヴァンドーム円柱の上に再び姿を現したナポレオン一世像であろう。また生地アジャクシオに建てられたものは別格にしても、リヨンやクールブヴォワでも彼の像は建てられている（後者はヴァンドーム円柱上に三三年から六三年まで据えられていたものを移転したもの）。騎馬像でいえばラ＝ロシュ＝シュル＝ヨン、シエルブルー、モントロー＝フォル＝ヨンヌ、グルノーブルにも建造されているのであるから、ルーアンが特殊ケースだとはいえない。しかしこれらのうち一度も引き倒されなかったのは、ルーアンを含めて三例だけなのである。

となれば、当地の皇帝崇拜、帝政支持の姿勢が看取できるわけだが、そもそもルーアンには、グルノーブル、リヨン（百日天下）やラ＝ロシュ（都市建設）、モントロー（戦勝）などのように、皇帝にまつわる目だったエピソードがない。またナポレオンが権力を掌握した当初、ルーアン市民は彼を支持していたわけではなかった。ではなぜ市民感情は変化したのか。何が市民の熱烈な皇帝崇拜を生み出し、支えたのだろうか。市中心部に置かれた騎馬像には、市民のどのような思いが反映されているのだろうか。こうした問いにこたえながら、ナポレオンの「記憶」のありようの一面を浮き彫りにすることが本稿の狙いである。

① 西川長夫『フランスの近代とボナパルティズム』岩波書店、一九八

四年、二七〇頁。

② 杉本淑彦『ナポレオンとヨーロッパ意識』谷川稔編『歴史としての

ヨーロッパ・アイデンティティ』山川出版社、二〇〇三年、二二二―

一三九頁。

- ③ 服部孝彦「ナポレオンのヨーロッパ統合——「大陸体制」の夢と現実」紀平英作編『ヨーロッパ統合の理念と軌跡』京都大学学術出版会、二〇〇四年。

- ④ P. Nora (dir.), *Les lieux de mémoire*, Paris, 1984-1992.

- ⑤ 谷川稔「『記憶の場』の彼方に」P・ノラ編、谷川稔監訳『記憶の場——対立』岩波書店、二〇〇二年、六頁。

- ⑥ 同上、四一五頁。

- ⑦ B. Menager, *Les Napoléon du peuple*, Paris, 1988.

- ⑧ アラン・コルバン、石井洋二郎・石井啓子訳「人食いの村」藤原書店、一九九七年。

- ⑨ R. Dalison, *De la Saint Louis au Cent-cinquantième de la Révolution: Fêtes et cérémonies publiques en Seine-et-Marne (1815-1939)*, Paris, 1997, do., *Les trois couleurs, Marianne et l'Empereur: Fêtes libérales et politiques symboliques en France 1815-1870*, Paris, 2004, 第二帝政下の祭典研究について、p.6 は M. Tunesdell, *Spectacular politics: Louis-Napoléon Bonaparte and the Fête impériale, 1849-1870*, Oxford, 1997, R. Sanson, *Les 14 juillet, fête et conscience*

第一章 騎馬像概観

まず騎馬像の基本的な特徴を整理することしよう。その建造がルーアンで議論されるようになったのは、一八五三年のことである。県議会がこれを発議し、ルーアン市民のみならず広く県民に寄付が募られた。^①しかし折からの綿工業の不振のため計画は一時頓挫した。実際の工事は六三年になって始まり、^②六五年八月一日によりやく除幕式が行なわれた。設置場所は市庁舎正面の市役所広場であった（図1）。

nationale (1789-1975), Paris, 1976. また工藤光一「『国民祭典』と農村世界の政治文化——第二帝政下のシャンパーニュ地方——」『思想』八三六号、一九九四年、は、第二帝政下の祭典研究の可能性と射程を整理する上で非常に有用。xv, cf. R. Sanson, "Le 15 août: fête nationale du Second Empire", in: G. Corbin et al (ed.), *Les usages politiques des fêtes aux 19e-20e siècles*, Paris, 1995, 伝説の受容に関する最新の成果については、N. Petiteau, *Napoléon, de la mythologie à l'histoire*, Paris, 1999.

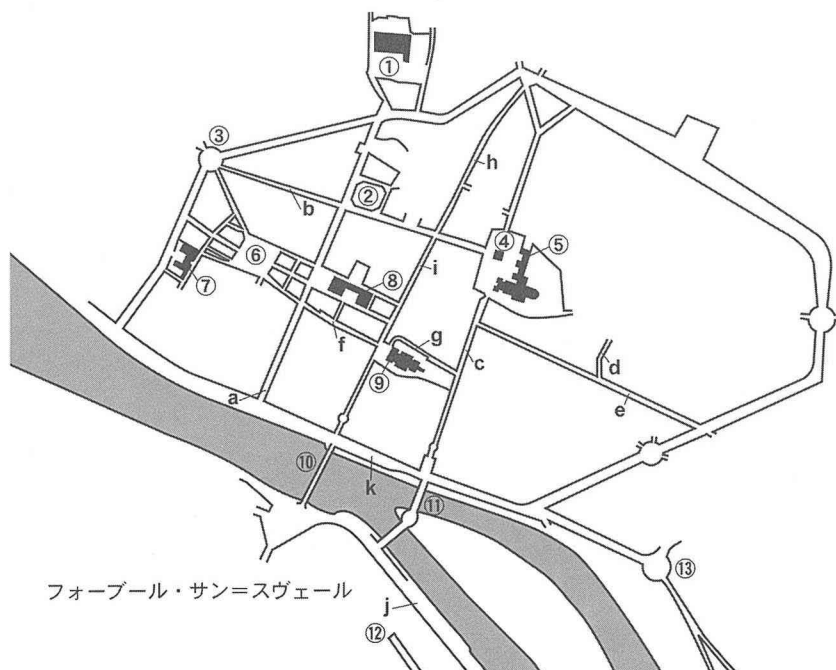
- ⑩ 井上幸治「ナポレオン伝説の成立」『思想』五五七号、一九七〇年一月。

- ⑪ 工藤、前掲論文。

- ⑫ 杉本淑彦「ナポレオン伝説とパリ」山川出版社、二〇〇二年。

- ⑬ 西原広望「王政復古期における民衆のナポレオン伝説——伝説を表現したメディアに注目して——」『札幌学院商経論集』一八一、二〇〇一年。同「総裁政府期からナポレオン帝政末期までのプロバガンダについて」『札幌学院商経論集』一九一、二〇〇三年。

- ⑭ Menager, *op. cit.*, p. 53.



フォーブル・サン＝スヴェール

図1 ルーアン市概略図(1875年ごろ)

- | | |
|-------------|---------------------|
| ① 右岸駅 | a ジャンヌ＝ダルク通り(皇妃通り) |
| ② ソルフェリーノ公園 | b 市役所通り |
| ③ コショワーズ広場 | c 共和国通り(帝国通り) |
| ④ 市役所広場 | d モリアン通り |
| ⑤ 市庁舎 | e アミアン通り(ナポレオン3世通り) |
| ⑥ 旧市場広場 | f 大時計通り |
| ⑦ 県知事公邸 | g サン＝ロマン通り |
| ⑧ 裁判所 | h ボーヴォワジヌ通り |
| ⑨ 大聖堂 | i カルム通り |
| ⑩ 吊り橋 | j グラン・クール |
| ⑪ 石橋 | k バリ河岸(ナポレオン河岸) |
| ⑫ 左岸駅 | |
| ⑬ サン＝ポール広場 | |

それではデュブレ作の騎馬像本体を確認してみよう。図2にあるように、この像は両足をあげた荒馬にまたがる軍服姿のナポレオンを表現している。馬は西を向き、ナポレオンはやや左斜め前を向いている。彼はトレードマークである二角帽はかぶらず、右手に持っている。材質に目を転じると、台座の前面プレートには、この像がアウステルリッツの戦いで獲得した大砲を鋳溶かして造った旨が記されている。軍服、荒馬、アウステルリッツという特徴から、この像が大陸支配者としてのナポレオン、彼の軍事栄光を顕彰していることは瞭然である。

デマレ作の台座に注目すると、左右側面には赤大理石で作られた四つのプレートがはめ込まれ、ナポレオンを意味する鷲とNのイニシャルの装飾がちりばめられている。四つのプレートにはそれぞれ「フランス帝国」「政教和約」「民法典」「レジオン・ドヌール勲章」の字句が彫り込まれている。さらに注目されるのは台座後正面に、ブロンズの浅浮き彫りが据えられていることである（図3）。これは、一八〇二年、第一統領であったナポレオンがルーアンを訪れたさい、セーヌ左岸のフォーブール・サン・スヴェールの工場群を視察し、その中の最年長の労働者に施しを与えた時の様子を描いた、イザベのデッサンを基に作成されたものである。以上のように台座には産業保護、宗教対立の解消、市民的権利の保障など主にナポレオンの内政面の業績が称えられている。

この騎馬像全体が訴えているものをネイションの視点で捉えるならば、まず想起されるのは第二帝政の国民統合であろう。六五年といえどプロイセンがデンマーク戦争の処理をめぐってオーストリアとの対決姿勢を明確にし、宰相ビスマルクがナポレオン三世と会談を行なって普墺戦争時の中立関係が密約された年である。クリミア戦争（五三年）、イタリア戦争（五九年）も含め、フランスがヨーロッパ列強間の争いの只中にある頃であるから、来るべき戦争に備えて国民の愛国心を鼓舞するには、アウステルリッツの勝者ナポレオンは打ってつけの人物であった。その一方で労働運動が激化した時期でもあり、国民の不安を対外戦争にむける狙いも込められていたのかもしれない。しかし「記憶」の戦略は、権力者による「上から」のメッセージに対する、市民の「下から」の同意の上に成り立つものである。それゆえ騎馬像を建てた地



图 2



图 3

方市民の思惑も検討せねばなるまい。

六五年にこのようなモニュメントを建造するにいたった市民感情はいかにして形づくられたのだろうか。またその場面が台座後正面に描かれるほど、市民に印象を残したナポレオンのルーアン来訪とはいかなるものであったのか。次章では主に生前のナポレオンとルーアンの関係について整理しよう。

① J-P. Chalme, *Napoléon et Rouen*, Rouen, 1984, pp. 12-13.

monuments, Rouen, 1997 (réimpression de l'édition de 1870), p. 309.

② N. Periaux, *Dictionnaire des rues et places de Rouen. Revue de ses*

第二章 「記憶」の起源

（一）最初のルーアン来訪

一七九九年十一月九日（共和八年ブリュメール一八日）、ナポレオンが権力を掌握した直後、ルーアン市民はどのような反応を見せたのだろうか。ルーアンは一八世紀に綿工業と海上商業により発展を続けていたが、前者は、一七八六年に結ばれた英仏通商航海条約によって安価なイギリス製品が国内市場に流入したため、大打撃を蒙っていた。後者にしても九一年までは革命前からの活況を維持していたが、九二年のサン・ドマングの奴隸反乱、九三年の対英戦争の勃発により、事実上全く行なわれていなかった^①。その上総裁政府期には、選挙結果を無効にするクーデタを政府自身が繰り返していたため政治不信が蔓延していた。それゆえナポレオンのクーデタにさいしても、市民はおよそ無関心であり、その承認の是非を問う国民投票も低調であった。投票総数はおよそ二〇〇〇であるが、九三年憲法の承認のさいの投票数三四七〇、共和三年の憲法承認のさいの五四五八と比べれば、大きく見劣りする^②。

ところが程なくしてルーアン市民はナポレオン支持へと傾倒してゆく。その理由としては県知事設置をはじめとする中

央集権的政策の成功、山賊やフクロウ党弾圧による治安回復、フランス銀行創設に代表される財政改革、政教和約締結による宗教対立の解消、また国有財産保有者の権利擁護、革命期の名士層の復権などが考えられる。^③しかし何より市民に期待を抱かせたのは、戦勝による平和の実現とこれをもたらした好況であろう。一八〇一年のリユネヴィルの和約、同年一〇月の英仏講和条約の予備条約締結、そして〇二年のアミアンの和約締結によってルーアンの海上商業はV字回復を果たす。一例を挙げるなら、共和一〇年のルーアン港出航船舶数は一七八九年水準の九五%、積載トン数の七七%にまで戻ったのである。^④また綿工業は綿花の供給が確保されたこともあって、統領政府期、帝政初期に機械化、生産能力の増大をみながら発展を遂げる。一七八二年にはルーアン徴税管区全体で一、八六五台の織機があつたが、一八〇五年にはセーヌ・アンフェリュール県だけで七三、九〇八台、そのうちの五二、〇〇〇台強がルーアン郡に集中していたのである。^⑤こうした華々しい成果は国民投票に如実に反映される。一八〇二年の終身統領就任を定める国民投票において、「賛成」に投票したルーアン市民は三、六〇〇を超えた。^⑥

こうした情勢下、ナポレオンは〇二年一〇月末から一一月にかけてノルマンディーを巡幸したのであつた。ノルマンディーが選ばれたのは、かの地が当時、経済的・戦略的に最重要地域であつたからに他ならない。^⑦巡幸の目的は、第一に、将来の王朝的体制への移行も見据えた権力の可視化であらう。しかしその他に行政・司法政策の実効視察、世論の把握、地方エリートとの直接の対面などの狙いもあつたと考えられる。^⑧

それではナポレオンの来訪の様子を整理しよう。〇二年一〇月三〇日（共和二年ブリュメール八日）、彼は県境で憲法上の諸機関、県知事ブーニョ、大司教カンバセレス、軍の士官、憲兵のほか先乗りしていた内相シャプタル、海軍相フォルフェラに出迎えられ、ルーアン市に向かう。そして市の境界サン・ポール広場で市長ドゥフォントネと市議会が出迎え、入市セレモニーが行なわれた。^⑨市長がこの日のために特注していた市門の鍵をナポレオンに渡すと、彼はこれを市長に返却しながらも次のように述べたと言う。「しかし私を守るべき、また誰かに委ねたくない鍵が他にある。それはルーアン

市民と県民の心の鍵である。」^⑩この後、ナポレオンは凱旋門をくぐり、市民の大歓声のなかを市中心部へと向かう。夜になって街路はイルミネーションで照らし出され、盛大に花火が打ち上げられた。

到着した日の夜からナポレオンは県知事公邸で名士を引見し、宴会で親交を深めるが、これだけで満足する人物ではなかった。翌日、彼はルーアン近郊を視察した後、カンバセレスと共にミサに参加し、夕方には市議会のメンバーの訪問を受けている。このさいに市からワイン四〇本とジャム四〇箱が若き為政者に送られた。^⑪次いで一月一日にはオワセル、プチックヴィリといった近隣の小都市やフォーブルを視察した後、市内の知識人、中央学校教授、林野・河川行政関係の役人、エルブフの製造業者を引見し、さらに夜は観劇に出かけている。二日にはマルタンヴィル地区の兵舎を訪れ、兵士と同じ食事を取った後、フォーブル・サン・スヴェールの工場群を視察した。このときに最年長の労働者に施与したことは前章で述べた通りである。三日には予定にはなかったエルブフへの視察を行い、夜の宴では名士たちが急遽組織した、ルーアンおよびノルマンディーの工業製品展示会を巡り実業家たちと交流している。^⑫このような精力的な行動はノルマンディーの工業力を直接把握するためであるが、ミサや引見、観劇、そして四日に行われた閲兵式も含めて、自身の姿をできるだけ多くの人の目に触れさせる狙いもあつてのことだろう。事実、ナポレオンは市民に熱狂的に迎えられた。このときの様子を、百日天下時の市長キュルメルは次のように回想している。

国家元首をとりまくルーアンの人々のなかには、慎重にも、ルーアンの人々の冷たい気質を予想する者もいたが、全く別のことが起きた。歓迎は桁外れなものだった。^⑬

ではナポレオンはどのような為政者として、ルーアンで歓迎されたのだろうか。まず『ルーアン新聞』に知事ブーニヨが寄せた一文を見よう。

市民諸君、二日後、第一統領があなた方の街にやって来る。彼こそあなた方が戦勝、平和、道德・秩序・法律の復帰に恩義を感じなくてはならない人物である。平時と同様に戦時においても疲れを知らぬ彼の行動が労働に次ぐ労働を引き受け、彼はその命また

人生の全ての時間をあなたの方の幸福に捧げている。「中略」彼はあなたの方の必要とするもの、またあなたの方の財産について視察しに来られるのだ。すなわち農業、商業、そして古来あなたの方の名を誉れ高いものにしてきた技芸を再び活気づけるために。^⑮

さらにプーニヨは県知事公邸でナポレオンの訪問を次のように祝した。

あなたのこの県への到来は、勤勉な家族の願いを満たすものです。彼らはあなたの福祉のために集い、その幸福を与えてくれた人のことを考えずにはいられません。あなたはここで、施設の十分整った港、稼働中の作業場、復活した商業、そして全ての新しい繁栄の要素が平和の陰で、またあなたの栄光の魅力のもとで、発展しているのを見てください。この平和、この栄光、この躍動、現在の情熱と将来の繁栄、全てはあなたの業績なのです。^⑯

またナポレオンを出迎えた凱旋門上部の装飾は「技芸と豊穡の像が第一統領の肖像を支え、これに付き添うフランスの精髓（像）が月桂樹の枝を彼に手渡ししている。また勝利の像がそれに平和のオリーブを結びつけている」ものであった。^⑰加えてナポレオンが宿泊した県知事公邸玄関には「平和の英雄」と書かれていた。^⑱以上を整理するなら、ナポレオンは「戦勝」「平和と秩序」「経済的繁栄」をもたらしてくれた為政者として顕彰されていると言えよう。また装飾にこめられているのはおそらくアンシアン・レジーム下の入市式においても見られた君主への「要望」であり、かつナポレオン個人への賛美であろう。

こうした歓迎に彼自身も大変満足したようである。兄ジョゼフあての書簡のなかでは「リヨンと同じくルーアンにも満足しました。この街は私を感動させるような愛着の証を示してくれます。ここでは目にするものが全てが慰みになります。本当にこの美しく善良なノルマンディーを愛しています。ここは真のフランスです。^⑲」と手放しの褒めようである。事実、ナポレオンはルーアンに対する優遇措置を次々と打ち出してゆく。一八〇二年末、彼はルーアンを含めた各地の商業会議所の再建を認めたが、これ以後当地の綿工業は絶頂期を迎えることになる。同年、市内に存する機械制綿糸工場は二つであったが、〇六年には一〇、〇七年には五三と増加の一途をたどった。^⑳また〇三年、アカデミー再建も許可し、さらには

カンパセレスの枢機卿昇進にさいしても推薦の労をとっている。人々のナポレオンへの支持は想像に難くない。○四年、帝政移行を決定する国民投票のさい、県内では六四、二〇八票が「賛成」、一〇票が「反対」であった。圧倒的多数もさることながら、投票率が前回（○二年）より三八・五％も増加していたのである。^{②④}

（二） 二度目のルーアン来訪と帝政の崩壊

その後、フランスは再びヨーロッパ諸国の包囲網の中におかれ、海上商業はイギリスによって完全に遮断されてしまう。この時期の県内諸港に関する政府報告にルーアンに関する記述が全く見られないことは、かえってその悲惨な状況を物語っている。^{②⑤} 綿工業の道程も順調でなかった。一八〇三年以後のルーアン公設市場における綿糸販売量は、○四年から○五年にピークを迎えるが、その後数度の不況に見舞われる。○六年には市内の紡績工場の三分の二が閉鎖され、○八年の不況では、ルーアン郡で雇用されている紡績工、織布工の数は、それぞれ一二、一七六から三、四二一人、七八、四一〇人から二九、四四〇人に激減した。一〇年の上期には生産が拡大するものの、半ばにはより深刻な危機が訪れることになる。全国的な不況がルーアンを直撃したのだが、こうした危機は海上戦争とサンドマングの独立、アメリカの出航禁止法、スペイン戦争の勃発などによる綿花供給の停滞、そして○六年以後の輸入関税引き上げによる価格高騰が複合的に関わった結果であると考えられる。^{②⑥}

一〇年五月三〇日、皇帝が新婦マリールイーズを伴ってルーアンを訪れたのは、このような状況下であった。今回も、前回と同様のセレモニーが執り行われ、レセプション、観劇も為された。^{②⑦} 工業製品展示会は規模を拡大して開催され、女性たちによって特産品が皇妃に献上されるなど、経済保護の陳情にかけ名士の必死の思いが伝わってくる。^{②⑧} さらに皇帝は市内の視察にも余念がなかった。今回彼が注目したのは、セーヌ川にかかる橋である。ルーアンはセーヌ川が市南部を東西に流れているが、兩岸を結ぶ橋は、一七世紀から舟橋で代用しており、流通を大きく停滞させていた。そこで皇帝は

経済発展の限界に鑑み、新橋（石橋）の建設を命ずる。^{②⑦}二九年に完成するこの橋を彼が見ることはなかったが、その架橋工事は後述するように、その後の市経済に思いもよらぬ波及効果を生み出すのである。

しかし帝政末期、ナポレオンへの支持は急速に収縮してゆく。商工業の停滞に加え、帝政貴族の創出はブルジョワジーの離反を招き、飽くなき戦争が加速度的に徴兵人員を増加させたことで市民の間に厭戦ムードが広まっていった。たとえば「帝国リセ」は給費制度があつたにもかかわらず学生数が三〇〇名弱であつたのに対し、同時期のイエズス会のコレージュには常時一、〇〇〇人を超す学生がいたという。^{②⑧}先のキュルメルも一〇年に「私ほど偉大な皇帝を評価している者はいなかった。しかし私は、彼の名と庇護のもとに、官吏どもが遠慮なく非軍人たちを征服民のように扱うのには鼻持ちならなかった」と述べている。^{②⑨}警察国家への不満は確実に高まっていた。

それゆえ転戦する夫に代わり、一三年九月、マリールーズが来訪し石橋の定礎式に出席した際にも、以前のような熱狂はまき起こらなかった。鍵の授与やワインの謹呈など歓迎セレモニーも為され工場視察も行われた。しかし多くの市民が集まつたとはいえ、彼らは皆押し黙っていたという。^{③①}また知事の内相あての報告によれば、皇妃来訪の報せを聞いたルーアンの名士たちは微発を恐れて市外に逃げ出し、それゆえ知事は随行団の宿を確保するのに苦慮している。^{③②}一月の報告は、帝政にもはや愛着を持たない商人、沈黙を守る貴族、そして帝政の危機を一七九三年から九四年の危機になぞらえて、カフェで革命歌を歌う「ジャコバン」の姿を伝えている。^{③③}市民たちの公然たる反抗が始まっていたのである。

だからこそ一八一四年、ルーアンにおける帝政は驚くほどあつけなく倒れた。四月六日の退位の一報の直後、当地を治めていたジュールダン元帥は軍に対してルイ一八世への忠誠を求める通達を発し、率先して白旗を三色旗に代えて掲げた。^{③④}県知事スタニスラス・ド・ジラルダンも新体制を問もなく支持し、^{③⑤}そしてナポレオンによって市長に任命され、男爵でもあつたルズリエ・ド・ラ・マルテル Leunier de la Martel はブルボン家への支持を表明して、市内に次のような掲示を出させた。

抑圧的な政府が、庇護的・福祉的な権力に取って代わられようとしている。世界は息を吹き返し、血は流れるのを止めるだろう。徴兵はもはやない。ルーアン住民よ、旧来の王朝に忠誠を誓おう、いたるところでわれらの叫びが聞かれんことを。国王ばんざい、ルー一八世ばんざい。^⑧

ナポレオン体制は「平和」「秩序」と「経済的繁栄」をもたらしたことでルーアン市民に受容された体制であった。それゆえ間断ない戦争と徴兵による混乱、そして経済危機はそのまま体制への失望に直結したのである。こうしてナポレオン伝説には幕が下ろされたかに見えたのだった。

- ① 服部春彦『ナポレオンの大陸封鎖をめぐるフランス世論の動向——第一帝政史研究への一視角——』（平成一五—一六年度科学研究費補助金 基盤研究（C）（二）研究成果報告書）二〇〇五年三月、一八頁。
- ② G. Daly, *Inside Napoleonic France: State and Society in Rouen, 1800-1816*, Aldershot, 2001, p. 250. 「賛成」としたのは二〇〇〇票弱「反対」は四票。
- ③ Chaline, *Napoleon et Rouen*, pp. 4-5. ルーアン随一の名士であり、革命以降、三部会議員や市長、県議会議長などを歴任したドウフォントネが市政に復帰したことは、ルーアンのブルジョワたちに大きな期待を抱かせたであろう。
- ④ 服部、前掲報告書、一九頁。
- ⑤ 同上、二二頁。
- ⑥ Daly, *op. cit.*, p. 250.
- ⑦ J.-O. Boudon, "Le voyage du premier consul en Normandie", *Études Normandes*, 2002-2, pp. 7-9; *do*, "La visite de Bonaparte en Normandie", *Napoleon 1er: le magazine du consulat et de l'Empire*, 12, mars-avril, 2002.
- ⑧ Boudon, "Le voyage du premier consul en Normandie", pp. 18-20. ホナバルトがミサなど折々の機会において「君主」としての待遇を求めていたことから推察される。 *Ibid.* p. 12.
- ⑨ 一八〇二年のルーアン来訪の様子については、*Journal de Rouen*, 9-17 Brumaire, an XI. Boudon, "Le voyage du premier consul en Normandie", pp. 12-13; Chaline, *Napoleon et Rouen*, pp. 5-6. ただしシャリヌの記述には誤記も見られる。
- ⑩ フランス歴代王権の入市儀礼については、小山啓子「フランス・ルネサンス王権と都市社会」九州大学出版会、二〇〇六年。またルーアンのそれにかんしては、高橋暁生「ルイ一六世のノルマンディー行幸（一七八六年）」宮崎揚弘編『続・ヨーロッパ世界と旅』法政大学出版局、二〇〇一年。P. Deschamps, *Les entrées à Rouen*, Rouen, 1975.
- ⑪ P. J. E. V. Guibert, *Voyage fait par le Premier consul, en l'an XI de la République, dans les départements de l'Eure et de la Seine-Inférieure*, Rouen, p. 12; *Journal de Rouen*, 10 Brumaire, an XI.
- ⑫ Guibert, *op. cit.*, p. 19; *Journal de Rouen*, 10 Brumaire, an XI. 本記述はChaline, *Napoleon et Rouen*, p. 6. の記述をもとに、誤記が見られる。

- ⑬ J-P. Chaline, "Les expositions industrielles et coloniales à Rouen au XIXe siècles", *EN*, 2003-4, pp. 32-33. ナポレオン時代の記録「年寄の持本館の記録」を「マス」が散見される。
- ⑭ J-P. Chaline (éd.), *Deux bourgeois en leur temps: documents sur la société rouennaise du XIXe siècle*, Rouen, 1977, p. 79.
- ⑮ *Journal de Rouen* 5 Brumaire, an XI.
- ⑯ *Journal de Rouen* 10 Brumaire, an XI; Boudon, "Le voyage du premier consul en Normandie", pp. 12, 18.
- ⑰ Boudon, "Le voyage du premier consul en Normandie", p. 11. 既掲文の「今」を「ナポレオン」に改定した点に注意。
- ⑱ *Journal de Rouen*, 9 Brumaire, an XI.
- ⑲ Boudon, "Le voyage du premier consul en Normandie", p. 20.
- ⑳ A. Fierro, A. Paillet-Guillard, J. Tulard (éd.), *Histoire et Dictionnaire du consulat et de l'Empire*, Paris, 1995, p. 1066.
- ㉑ Boudon, "Le voyage du premier consul en Normandie", p. 20.
- ㉒ Dally, *op. cit.*, p. 252.
- ㉓ 服部「前掲報告書」二〇頁。
- ㉔ 同「二二―二三頁」Dally, *op. cit.*, p. 253.
- ㉕ H. Geispitz, "Voyage de Napoléon Ier à Rouen en 1810", *Bulletin de la société libre d'émulation*, 1926-27, pp. 53-71; *Journal de Rouen*, 31 mai-1 juin, 1810.
- ㉖ Geispitz, *op. cit.*, pp. 48-51, 64-68.
- ㉗ *Ibid.*, p. 62.
- ㉘ Chaline, *Napoléon et Rouen*, pp. 7-8.
- ㉙ Chaline (éd.), *Deux bourgeois*, pp. 94-95.
- ㉚ J. Vidalenc, *Textes sur l'histoire de la Seine Inférieure à l'époque napoléonienne (1800-1814)*, Rouen, 1976, p. 113; Chaline, *Napoléon et Rouen*, p. 9.
- ㉛ Vidalenc, *op. cit.*, p. 113.
- ㉜ *Ibid.*, p. 121.
- ㉝ M. de Bonard (dir.), *Documents de l'histoire de la Normandie*, Toulouse, 1972, p. 345.
- ㉞ *Ibid.*, p. 346.
- ㉟ Chaline, *Napoléon et Rouen*, p. 10.

第三章 ナポレオンの黄金伝説

(一) 下町のナポレオン

前章では、ナポレオンとルーアン市民との二度にわたる邂逅について整理したが、このような交流は特別でもなく、市民の「記憶」に長くとどめられない。ただでさえ復古王政は、ナポレオン伝説を根絶しようと伝説の暗黒化をはかったの

であるから、一八一四年の市民の失望と六五年の銅像建設の間には大きな隔たりがあり、これを埋める、いわば市民感情の変化を促すような更なる事件があったはずである。本章ではこの問題について復古王政期のナポレオン熱、四〇年の遺骸の帰還、そしてルーアンの都市改造の三点から考える。復古王政期にナポレオンはどのようにイメージされてゆくのだろうか。杉本氏は帝政末期からこの時期にかけて、パリにおけるナポレオン伝説が暗黒に彩られてゆくものの、復古王政への幻滅がナポレオン待望論を生み出し、それが彼の死と『セント＝ヘレナ回想録』の出版を機に高まった結果、伝説が「再黄金化」してゆくさまを論じている^①。しかしパリにおけるこうした展開は、地方でも同様に見られるのであろうか。ダリーおよび西願氏の分析を参照しながら、ルーアンにおける事例を考えてみよう。

ナポレオン伝説の影響力を十分認識していたため、ルイ一八世は即位後ただちにナポレオンの肖像やそれを想起させるモノUMENTを全て公共の場から撤去し、さらにその破壊を命じた。事実、ルーアンにおいても、県内から集められた肖像が廃棄されている^②。しかし百日天下前後の市民の反応についてダリーは、復古王政が海上商業の復活をもたらしたがゆえに、商人層や名士層はこれを歓迎する一方、イギリス製品との競争にさらされ敗北した製造業者やその労働者たちは、帝政期のノスタルジーに駆られたと指摘して、市民の反応の多様性を強調している^③。

実際、復古王政からルーアンの人々の感情は間もなく離反したようである。例えば次のようなエピソードがある。当時セーヌ川べりにあった「四本の柱」座の座長でシャンソン歌手でもあったグランガレ（この芸名は、瘦せたちびの意）は、しばしば無料で客寄せの道化芝居を行っていた。彼は政治風刺が得意であり、幾度も罰金や投獄の憂目に遭っているが、ブルボン家が権力の座に返り咲いてから間もなくのころ、セーヌ右岸の「パリ河岸」で次のような寸劇を催し、拍手喝采を得ている。豚を買いつけるおどけた肉屋を演じるグランガレは、農民の売る、武器で飾り立てられた豚の値踏みをする。

グランガレ「その太った豚はいくらだい？」

農民「一八ルイでさ」「一ルイは二〇フラン」

グランガレ「一ハルイだつて？ こいつはナポレオンほど値打ちがないな！」^④

ルイ一八世を豚呼ばわりしたこの劇は河岸中にすぐに知れ渡り、官憲が上演を中止させたのだが、市民の間で王政がすなりと受け入れられていないことが看取できる。

百日天下の崩壊した後の第二次復古王政期において、ルーアンの商工業は活況を呈していた。港には船舶が往来し、織維工業も軌道に乗った。^⑤ それではナポレオンは忘れ去られたのであろうか。しかし一六年、ルーアンには、グルノーブルでナポレオン二世の即位が布告されるとの噂が流れ、^⑥ またこんな掲示が張り出されたという。「不幸なフランス人よ！ 「中略」ほら、商取引もなく、パンもなく、連合軍の為に。君には最後の一つも残らないだろう。ブルボン家の為に君は犠牲にされるだろう。君に必要なのはナポレオンだ。これらのならず者を追い払い、君を幸せにするために。我々の尊厳と名誉は彼によってでしか存在しなかった」。また一七年にルーアンで流布したビラ『ナポレオン・ボナパルトの声明文』は、ナポレオンのセント・ヘレナ脱出とフィラデルフィア上陸を伝えていた。^⑧ さらに同年の食糧危機のさいには、ナポレオンを待望する声が市内で聞かれている。^⑨ こうした事例は復古王政初期でさえ、ルーアンにおいてナポレオンの人気は地に落ちておらず、その伝説が暗黒一色であったとは言いがたいことを示している。

皇帝の死の翌年にあたる二二年、ルーアン警察による押収品の中には、ナポレオン像を作成するための鋳型と銅像、そしてナポレオンの人生を物語る肖像画入りのデザート皿があった。^⑩ また二〇年と二二年には、ナポレオンの肖像をあしらったラベルの貼られた瓶リキュールが売られており、^⑪ 加えて二三年には、ナポレオンとマリー・ルイズの版画が押収されている。^⑫ 銅像作成は熱烈な崇拜者の行いであろうが、皿の柄やリキュールのラベルは市販性を高める意図もあったであろう。版画は、その性格上、少なくない数が刷られたはずである。復古王政期のルーアンにおける投票がリベローに偏っていたことを併せて考えるなら、こうした事例は二〇年代ルーアンにおいて王政への幻滅が一定程度広がっていたことを窺わせる。

しかしナポレオン待望論の浸透を過大に評価することも控えなければならぬ。例えば、二六年にルーアンで出版された『ルーアン 歴史、商業、工業、製造、モニュメントの概要』という書物には、ルーアンにおけるアカデミーの復活、新橋の建設は触れられていても、それがそもそも誰の布告によるのかということは一切書かれていない。ナポレオンによる商業会議所の再建やフォーブール訪問については記述すらなく、革命以後の政治情勢に関わるものは注意深く避けられている^⑭。さらに七月王政下について言えば、ルイ・ナポレオン・ボナパルトが三六年と四〇年（八月）の二度にわたり反政府暴動を起こしたときも、市民は何ら呼応していない^⑮。

以上を整理するなら復古王政期ルーアンにおけるナポレオンの評判は「暗黒伝説」に彩られているとはいいたい。むしろその評価はナポレオンの存命中から好意的である。それゆえ彼の死と『回想録』の出版は、なおのこと伝説の再黄金化に寄与することになっただろう。ただしこうした親近感はいさほど特別なことでもない。ナポレオンの訪問やそれにまつわる記憶がその根底にあるとはいえ、それが単なるエピソードの域を超えて、銅像建設という熱狂へと昇華するには今ひとつの事件が必要だった。それが「遺骸の帰還」である。

（二） 遺骸の帰還

七月革命のさいバリケードの上に即位したルイ・フィリップであったが、オルレアン家にはブルボン王家を支持する正統王朝派、また共和派の双方から、権力の正統性について常に疑義が申し立てられていた。それゆえ七月王政は何らかの形で、自身が大革命の継承者であることを示し、各派の調停に努めなければならなかった。オルレアン派、正統王朝派、共和派そしてボナパルト派を等しく満足させるような凱旋門の建造や、一八四〇年末のナポレオンの遺骸の帰還は、そのような脆弱性を認識した政府の起死回生の妙策であった。特に前年来のエジプト危機に端を発する外交面での失政は体制の求心力低下、ひいては崩壊を助長しかねなかったのであるから、ルイ・ナポレオンによるクーデタ未遂があつたにして

も、ナポレオン一世の威光を利用しない手はなかったのである。一〇月中旬に大西洋の孤島セント・ヘレナを出発した遺骸は、ル・アーヴルからセ・ヌ川に入り、ルーアンを通過して遡行しクールブヴォワにて上陸、以後は陸路パリへ向かうことになっていた。では、この帰還をルーアン市民はどのように迎えたのだろうか。

遺骸の帰還決定が伝えられると、一〇月二四日、ルーアン市議会は全会一致でフルリ以下六名の委員^⑰を定め、彼らがパリへ出向いて「遺骸をルーアンにて上陸させ、また栄えある遺骸の帰還をこれに相応しいセレモニーで祝賀する」許可を政府に求めることを決議した。委員により繰り返しなされた懇望に対して、上級官庁は「皇帝ナポレオンの葬儀の厳肅さは、国民的厳肅さの性格を持たなければならない。いかなるケースでも、ローカルなセレモニーに矮小化されてはならない。フランス全体が偉大な人物にオマージュを捧げるのである。〔中略〕これら葬儀は王国の首都で始められなければならないのである」と回答し、ルーアン市の申し出を却下した^⑱。しかし一一月二四日、県知事はこの通達を委員に伝えるさい、やや含みのある表現で、こう付け加えた。

英雄の遺骸がルーアンを通過するさいに、フランス国民を満足させる偉大なこの行為によってわれらが抱く感情を表明することまで、禁じられたわけではない。船団はルーアンを非常にゆつくりと進むことだろう。市民が尊敬の徴を表明することができるように^⑲。ルーアン市の公式記録によれば、中央からの通達が伝えられると、これに対する世論が沸騰したため、結局ルーアン市に對して、この偉大な状況に即したプランでセレモニーを行なうよう指示が出されたという^⑳。一二月一〇日という遺骸通過の期日がルーアンに伝えられたのは、四日。五日に市議会内の各委員会による準備が本格化した^㉑。『ルーアン新聞』はセント・ヘレナを出発してからパリまでの行程を特集する一方で、準備の進捗状況を連日伝え、市民の期待を煽った。全ての準備が完了したのは、一〇日早朝。市民が夜を徹して作業し、間に合わせたのである^㉒。以下、セレモニーの様子を追ってみよう^㉓。

一〇時半、大砲が棺を運んだ船団の到着を告げた。すでに両岸にはオペリスクが建てられ、それぞれナポレオンの名だ

たる戦勝名が記されている。また帝国の紋章、鷲を描いた旗の束が数多く屹立し、その間に儀式用の制服を着た軍団と国民衛兵が集合していた。ひしめく群集からは「皇帝万歳！」の歓呼が響きわたる。遺骸を載せたドラド号は五隻の船に護衛されながらゆつくりと進み、市民の注意はセレモニーのメイン・シンボルに向けられる。それは四年前に完成したばかりのつり橋である。この橋の中央アーチ上部は旗、黄金のミツバチと冠を戴いたNのイニシャルが散りばめられたバイオレットの幕、無数のレジオン・ドヌール勲章、月桂冠を差し出す「勝利」の像などで飾り立てられた。まさしく入市儀式時の「凱旋門」の装いで、橋上には、かつての「大軍隊」の兵士たちが集っていた。船団はその下をぐりぬけてさらに速度を落とした。

左岸には巨大なバイオレットの天幕が張られ、諸機関と聖職者が一堂に会していたのだが、船団はこの前で停泊する。そこにルーアン司教が進み出て、赦免を与える。しばらくして後、船団は動き始め、皇帝が建造を命じた石橋の下を通過し、パリ方面へ遡上していった。橋の上には王立コレージュ（旧帝国リセ）の生徒たちが整列してこれを見送った。この帰還に随行したコクロー神父の回想録は、ルーアン市民の熱烈な歓迎を伝える。

戦勝記念品に覆われた河岸は武器できらきら輝き、騎兵隊の馬は後脚で立ち上がり、兜は陽光浴びて燦然と輝き、羽根飾りと旗は揺れて混ざりあい、ひな壇は華やかにおめかしした婦人たちで飾られ、そして橋いっぱいに帝政期の軍服姿の兵士たち。彼ら兵士たちはヨーロッパ中が大軍隊と呼んでいたあの軍団の輝かしい名残。広い停泊地には小艦隊が戦闘隊形。ファンファーレ、音楽、低音管楽器の一斉演奏、丘の上から絶えず響く大砲。一〇〇人ほどの司祭の白い祭服が、金で飾り立てられた軍服や、司法官たちの緋色の法服と混ざり合う。そして最後に祈祷をあまねく施し、祝福を与えんと大司教が河岸へと進み寄り、その時、あまたの声^⑤が哀悼の賛美歌「深き淵より」を神に捧げる。

またこの歓迎セレモニーについて、『ルーアン新聞』は次のように伝えた。

太鼓は全て、榮譽礼を行なう時のやり方で aux Champs 打ち鳴らされ、全ての鐘は活気づいて響き、大砲の轟音はあらゆるとこ

ろに反響し、教会の歌が聖職者によって歌われた。全ての目はこのか弱い小船に注がれた。そのへさきの上には、その人生の間、世界にその名と功績をとどろかせた人が載っているのだ。^{②⑥}

コクローは「これほど威厳あふれる光景を呈する舞台は、ついぞなかったのではなからうか」「こういったこと全てが魂の奥底まで感動させ、その感動は思い出となって今でも私をとらえている」^{②⑦}とも記しており、ルーアン市民の歓迎が尋常でなかったことを綴っている。帝政末期の市民の辛苦などは霧消したかのようである。

しかも成功裏に終わったこのイベントの衝撃は一過性ではなかった。この事件を扱ったビラ、パンフレット、リトグラフ、版画が作成され流布したほか、様々な記念品——メダル、遺骸の帰還を再現したストーリーリー仕立ての皿のセット（二枚一組）、ハンカチなど——が売りに出された。イベントの熱狂的な雰囲気がこうした日用品に「記憶」として刻印されることで、人々に英雄ナポレオンのイメージが身近になり、また帝政末期の苦難が忘却されていたことは間違いないだろう。事実、四一年、この遺骸の帰還を記念して、グラン・ボン門からシャン・ド・マルス付近までのセーヌ右岸が「パリ河岸」から「ナポレオン河岸」に名称変更されたことは、遺骸帰還イベントの衝撃の大きさ、ナポレオン伝説の再黄金化の始まりを示している。^{②⑧}

このイベントこそ市民のナポレオン崇拜に決定的な意味を持ったものだった。この熱狂は八年を経過しても余熱を保っていたらしい。第二共和政下の大統領選挙においてレイ・ナポレオン・ボナパルトは、ルーアン市における投票数二六、八四四のうち二一、〇七〇、実に七八%の票を得て圧勝したのである。^{②⑨}

(三) ルーアンの都市改造

フランスにとって一九世紀は都市改造の世紀である。一般には第二帝政下のオスマン知事によるパリ大改造が知られている。ルーアンでもほぼ同時期、都市改造の動きが本格化し、現在の街並みが整えられてゆく。

とはいえ既に一八世紀末、ルーアンの都市機能は限界に達し、その改造の必要性が指摘されていた。一七八八年にこの街を訪れたアーサー・ヤングは「ルーアン商人がこの大変見苦しい悪臭のするごちゃごちゃした都会から出るため——田園に別荘をもつのもうなずける。この都会ときたら、泥土と工業だけである」と書き記している。^⑧一八世紀に地方長官による市街の部分的改造と左岸フォーブル・サン・スヴェールの整備がなされたものの、根本的な問題は何一つ解決しないままだった。たとえば都市経済の観点からすれば、ルーアンには市内を貫く動脈と恒久的な橋が欠けていた。南北の大通りはボーヴォワジーヌ通りとカルム通り、東西の大通りは大時計通りとサン・ロマン通りであったが、これらは古都の歴史的重みを感じさせる美しさを保持していても、その狭さの弊害は覆うべくもなかった。さらにセーヌ川にかかる橋は、一六三〇年から舟橋で代用しており、兩岸の間の流通を大きく停滞させていた。美観への配慮は全く見られず、さらには社会的な問題も脅威であった。市東部のマルタンヴィル地区、特にサン・ヴィヴァン、サン・マクルー両教区はスラム化が進行しており、その解決は都市全体の課題でもあった。事実、一八三二年にはこの界隈でコレラが大流行し、四年には「危険な階級」が蜂起することになるのである。^⑨

この状況に最初の一手を打ったのが、ナポレオン一世である。先述したように彼は一〇年、石橋の建設を命じ、二九年、橋はようやく完成する。しかし石橋はルーアン港の規模を縮小しないよう従来の市の中心から東へずらしたところに架けられる必要があった。そこで中洲のラクロワ島をまたぎ、左岸と右岸のバリ河岸を結ぶような形で建設されたのである（図1）。このことがルーアンの都市改造をドミノ式に引き起こすことになる。

この建設には大規模な護岸工事が必要であった。市東部左岸は右岸よりも低くなった湿地帯であり、橋の建設には盛り土および補強工事が欠かせなかったためである。これに併せて右岸も工事が進められる一方、沿岸の建物の改築も行なわれた。このさいにセーヌ川に面する建物には、高さや建築資材にかんする規制が定められたため、完成した街並の正面は均整を保ち、現在の威容の原型ができたのである。そして岸辺は散歩道として再生し、商業の場としても活況を呈する

ことになった。このように石橋の建設はセーヌ両岸の活性化を促すことになったが、市全体の流通の問題は未解決であった。というのも市東部に架橋したため、左岸から中心部に直接行くことができず、また橋の北端、セーヌ右岸から、さらにその北にある市役所へ至る道は細い路地のままであったからである。このため石橋の延長上の道を拡幅して整備し、市役所前を通る南北の新動脈を作ることが二九年に計画された^②。完成は第二帝政下の五二年四月にずれ込んだが、これが帝国通りである。そうすると今度は市役所から市中心部の裁判所や西部の県知事公邸とを結ぶ道路も必要となった。そこで五八年、市長ヴェルドレルは市役所前から市中心部を経てコシヨワーズ広場へといった直線道路の建設に着手した。ルーアンを東西に突っ切る、距離九〇〇メートル、幅一六メートルのこの新道は、市役所通りと呼ばれることになる^③。すなわち二つの新道の交差する位置にナポレオンの騎馬像は建てられたのである(図一)。

なおも開発は続く。鉄道の新駅(右岸駅)建設に伴い、この新駅と港を結ぶ第二の幹線道路が必要になったからである。これが六〇年に工事の始まった皇妃通りである(六二年に完成)。この皇妃通りと市役所通りの交差点にあたる場所には、元来なめし工たちの会館があったが、取り壊されたその跡地は街路の開通後、公園として整備されることになった。六三年九月五日に竣工したこの公園には、ソルフェリーノの名が冠せられた。この名は五九年、ナポレオン三世が指揮するフランス軍がオーストリア軍を撃破した、イタリアの戦勝地から採られたものである^④。

さらに同時期、環境改善と衛生化の必要性が叫ばれながらも、資金難や短期的な資金回収の面から後回しにされてきた東部地区の開発がようやく着手される。施療院の付近の薄汚れた路地、旧フォーブル・マレケリの界限は、帝国通りから東へ延びる新道建設(六二年)で一変した。これがナポレオン三世通りである^⑤。またその通りから北へ伸びるバス・キユル通りは、六七年、ナポレオン一世のもとで大蔵大臣を務めた、ルーアン出身の経済学者の名をとって、モリアン通りと改称されたのだった^⑥。

以上見てきたように、復古王政期以降、ルーアン市民のナポレオンに関する「記憶」は、パリにおける事例ほど浮沈の

激しいものではなかった。むしろ人々の間でナポレオンの人気は根強く残っていた。それが遺骸の帰還セレモニーを機に一気に高まりを見せたのだが、その様子からはこのイベントが、市民によるナポレオンの英雄視、第二共和政下のルイ＝ナポレオン大統領選出、そしておそらく帝政復活支持という道のりの一里塚となったことが窺えよう。このような記憶の変遷と時を同じくしてルーアンの再開発が進められたが、その先鞭をつけたのは、皇帝の命じた石橋建設であった。ここでもナポレオンは一九世紀の当市の繁栄を支えることになったのであり、街路、河岸、公園に印された帝国を想起させる名称は、都市の発展とナポレオンとを重ねあわせてイメージさせ、黄金伝説を増幅してゆく。そして騎馬像が設置された市役所広場は帝国通りと市役所通りの交差点にあたり、まさにナポレオンが切り開いた空間であったのである。次章では、六五年、市役所前にナポレオンが君臨するときの様子とその後の彼の「記憶」を見ることにしよう。

- ① 杉本、前掲書、第一・三章参照。
- ② 西願「王政復古」三九頁。
- ③ Dally, *op. cit.*, p. 256.
- ④ E. Noel, *Rouen, Rouennais, Rouenneries*, Rouen, 1894, pp. 109-110.
- ⑤ Chaline, *Napoléon et Rouen*, p. 11.
- ⑥ 西願「王政復古」三三頁。
- ⑦ 同上、三五頁。
- ⑧ 同上、三七頁。一六年から一八年にかけて流布したビラで、複数のテキストがあった。
- ⑨ Dally, *op. cit.*, p. 264.
- ⑩ 西願「王政復古」四〇、四二頁。
- ⑪ 同上、四二頁。
- ⑫ 同上、四〇頁。
- ⑬ Chaline, *Napoléon et Rouen*, p. 11.
- ⑭ T. Liquet, *Rouen: précis de son histoire, son commerce, son industrie*, ses manufactures, ses monuments: Guide nécessaire pour bien connaître cette capitale de la Normandie; suivi de notices sur Dieppe, Elbeuf, Le Havre, Bolbec, et les endroits les plus remarquables du département de la Seine - Inférieure, Rouen, 1826.
- ⑮ Chaline, *Napoléon et Rouen*, p. 11.
- ⑯ 杉本、前掲書、一一一―一二三頁。
- ⑰ N. Periaux, *Passage des cendres de l'empereur Napoléon à Rouen. Procès-verbal de la Cérémonie qui a eu lieu à Rouen, le 10 Décembre 1840 rédigé par ordre de M. Henry Barbet, Maire de Rouen*, Rouen, 1842, pp. 3-4.
- ⑱ Saint-Leger, "Passage à Rouen des cendres de Napoléon", *Revue de Rouen et de la Normandie*, 1841, pp. 23-24.
- ⑲ Periaux, *Passage des cendres*, p. 3.
- ⑳ Saint-Leger, "Passage à Rouen", p. 24.
- ㉑ *Ibid.*, p. 25. Periaux, *Passage des cendres*, p. 7.

- ② Saint-Leger, "Passage à Rouen", p. 25.
- ③ Periaux, *Passage des centres*, p. 9.
- ④ 以下、*Journal de Rouen*, 11 décembre, 1840; Saint-Leger, "Passage à Rouen", Periaux, *Passage des centres*, pp. 9-25. 以下参照。
- ⑤ ジャン・チュール、杉本淑彦訳「遺骸の帰還」『記憶の場』二〇〇三年、一二五頁。ただし一部修正。またフェリックス・コックロー、酒井傳六訳『ナポレオン発掘記』法政大学出版局、一九八二年。
- ⑥ *Journal de Rouen*, 11 décembre, 1840.
- ⑦ テュール、前掲論文、一二五頁。
- ⑧ Chaline, *Napoléon et Rouen*, p. 12; Periaux, *Dictionnaire des rues et places de Rouen*, p. 432.
- ⑨ J. Toutain, *La révolution de 1848 à Rouen*, Paris, 1948, p. 106.
- ⑩ アーサー・ヤング、宮崎洋訳『フランス紀行』法政大学出版局、一九八三年、一二六頁。
- ⑪ J.-P. Chaline, "Les grands travaux d'urbanisme à Rouen au XIXe siècle", *Les amis des monuments rouennais Bulletin*, janvier-septembre 1975, pp. 34-36, 40, do. *Rouen au milieu du XIXe siècle. La révolution de 1848*, Rouen, 1974.
- ⑫ Chaline, "Les grands travaux d'urbanisme", pp. 37-38.
- ⑬ A. Robinne, *Origine et histoire des rues de Rouen*, Rouen, 1997, pp. 31-34.
- ⑭ *Ibid.*
- ⑮ Chaline, "Les grands travaux d'urbanisme", pp. 39-43.
- ⑯ Robinne, *op. cit.*, p. 33.
- ⑰ *Ibid.*

第四章 記憶の再生産

(一) 一八六五年八月二五日

フランス革命以後、歴代の体制は文化統合の手段として祭りを利用してきた。教育の手段として祭典を公式に利用した革命政府はもちろん、第一帝政、復古王政、七月王政、第二共和政もその効用を認識し活用してきたことは同様であった。そのなかで第二帝政は国民祭典の期日をナポレオン一世の誕生日、八月二五日に限定し、より凝集性を高めた国民統合を推進した。さらにこの日は偶然にも聖母被昇天祭の日とも重なっていたため、民衆を動員するのに二重の意味で格好であった。

本稿の目的は祭典の分析ではないので、この聖ナポレオン祭についてはその特徴を大づかみに整理しておくのに留めよう。祭典は市町村単位で行なわれ、ミサとテ・デウム斉唱が主たるセレモニーであるが、併せてレジオン・ドヌール勲章授与式や閲兵式が行なわれることが多い。宗教セレモニーが終了した後は、名士や退役兵の宴会が夕方から催される。ただし祭りはこうした公的儀礼だけで終わらない。民衆の支持獲得を狙って貧民扶助のための施与が市内各地でなされるほか、後述するように娯楽を提供するという側面もあった。ルーアンにおいてこの祭典が実施されたのは一八五二年から六九年までであるが（七〇年は中止）、以下では騎馬像が設置された六五年八月一五日の祭典の様子を見ることにしよう。^①

午後一時半、大聖堂においてヴァイヤン元帥らパリからの来賓臨席のもと、テ・デウム斉唱式が催される。その後一団は市庁舎へ向かい、いったん市庁舎内の広間で市長へのレジオン・ドヌール勲章授与式が行なわれた。そして二時半から、物見高い市民で埋め尽くされた市役所広場において、騎馬像の除幕式が始まった。この除幕式には、行政・司法の各機関、軍、退役兵、国民衛兵、消防団が招集されたほか、大司教ら聖職者そしてセント・ヘレナ・メダルを受賞者も招待されていた。除幕後、まず元帥が演説を行なう。彼は若き日のナポレオン一世との邂逅を語った後、騎馬像を寄付金で建てたルーアン市民を称える。さらに「実際のところルーアンほど皇帝に愛された街はない」と続け、ナポレオン三世という新たな皇帝に仕えることができる喜びを語って締めくくった。続いて元市長バルベの演説が始まる。彼は、遺骸の帰還時におけるルーアン市長である。以下に挙げるその演説には、ルーアンの名士が抱いてきたナポレオン一世のイメージが凝縮されていると言えよう。

ルーアン市としてその繁栄と豊かさを皇帝の実り多きイニシアティヴに負っていることを記憶している点では「皇帝像を建てたシエールブル、リヨン、アジャクシオに」劣りません。ルーアンは彼が降り立ったまさにその場所にモニュメントを建てたのです。そのモニュメントは、彼の統治によってわれらのための新しい時代が始まり、またわれらの産業は彼の才気の創造物の一つであることを想起させずにはおきません。「中略」この県がナポレオン一世に負っている全てを理解するには、六〇年前に遡り、一八〇二

年以前のわが都市と地方がどうであつたか自問自答しなければならぬのです。

彼は「素晴らしい製造業と工場群の存在」を挙げ、それが周辺部に富をもたらしていること、しかし以前は湿地帯で不衛生であり、人口も少なかったことを指摘する。その上でこの状況を変えたのがナポレオンであり、彼の導きによって産業の振興が見られ、ルーアンはマンチェスターに比肩しうようになったと述べる。そして最初の訪問に言及する。

彼は自らわれらの工場を視察しました。ああ、それはまだ数も少なく、貧相で、機械化も進んでいない代物でしたが、彼は、自身が行なおうとしていた有力な後ろ盾のもとでなら、それが将来あらゆる繁栄と豊かさを享受するだろうことを既に予見しておられました。彼はわれらの工場の状態を、微に入り細をうがち、自分の目で確認することをお望みになりました。彼はわれらの生活必需品をご覧になり、自ら手に取られたのです。彼は最も専門知識のある人を集め、その意見を聴取し、彼らの試みを奨励し、協力を約束されました。〔中略〕われらの産業が本当に始まったのは、この日からなのです。

続けてバルベは、本格的に開始された製造業の発展が蒸気機関を利用した工場群を生み、コストダウンを実現しながら、消費を増大せたと主張する。そして六〇年以後、自由貿易に踏み切ったナポレオン三世を評して次のように言う。

達成された進歩によって、今日、ナポレオンの名を襲う、あまねく知られた後継者、その事業の後継者は、商業の自由の前にその国境を開くことができると信じ得ました。われらは、製品の完成度のために、外国との競争など恐れる必要はないのですが。

あらゆる野心的な試みをしのぐ、この繁栄の源を示さねばならないとしたら、それは皇帝ナポレオン一世、そしてその力強い奨励なのです。

演説は、第一帝政後のルーアン市民のナポレオン崇拜、遺骸の帰還における市民の歓迎、そしてナポレオン三世への賞賛で締めくくられる。そして公式セレモニーはレジオン・ドヌール勲章授与式を経て幕を閉じ、名士たちは宴会会場へと移る。一方、市中では施与のほか、公共遊戯、気球打ち上げ、花火、イルミネーション、オーケストラ演奏、ダンスといった娯楽が次々と提供され、市民たちの歓声が夜更けまで響いたのであつた。まさに国民統合政策と市民・民衆の娯楽を融

合させた祝祭であった。

続いてナポレオンの「記憶」とこのセレモニーの様子を踏まえて、第一章で見た騎馬像台座にこめられた意味を考えてみよう。そこでまず想起すべきは、この騎馬像が県主導で計画され、資金は名士の寄付で得られたものであるということである。それゆえ騎馬像はルーアン市民とくに名士層の第二帝政へのメッセージ、要望を表象しているといえよう。

ではどのようなメッセージであろうか。ここで注目されるのはルーアンのおかれていた状況、特にバルベの演説にも現れる、六〇年以後推進された自由貿易政策の影響である。六〇年一月に結ばれた英仏通商条約は、綿糸・綿織物、毛糸・毛織物などに設けられていた禁輸措置を廃棄し、関税も三〇%以下にすることを定めたため、以後ルーアンを初めとするノルマンディーには深刻な経済危機が訪れた。まるで一七八六年の再来である。これに加え、アメリカ南北戦争の勃発により米国産綿花の供給が途絶したことが、家内織工や施設が老朽化した工場、また資本の少ない零細工場には大打撃となった。例えば一八五九年、県内の製糸工場は二三三、インド更紗製造工場は四三あったが、六九年にはそれぞれ一八五、二二に激減している。唯一、機械織機の数が九、〇〇〇から二二、〇〇〇に増えたのだが、これは職人たちの失業を反映したものであろう。^③ こうして破産が相次ぎ、ルーアン市内では一万の失業者が出たとされる。^④

そうであれば、バルベのナポレオン一世賛美の演説や、第一章で見た台座レリーフの意味も自ずと明らかになってくる。バルベは、〇二年以後、ナポレオンが視察を熱心に行ない、地方ブルジョワの意見に耳を傾け、産業を奨励して、ルーアンに繁栄をもたらしたことを繰り返し述べる。演説中の「われわれは、製品の完成度のために、外国との競争など恐れる必要はない」という言葉は、無論、字義通り受け取ることとはできない。むしろ保護を求める逆説的なアピールと解すべきであろう。こうした演説や台座の「施与」のレリーフは、ナポレオン一世の治世に仮託した彼らの切なる願い、平和と秩序と経済的繁栄をもたらし、ルーアンの街を切り開き、そして資本家や民衆と共にあったナポレオン一世こそ偉大であったのだというメッセージなのである。

この種のアピールは、一八六八年五月三十一日、ナポレオン三世が騎馬像設置後、初めてルーアンを訪れたさいにも見る^⑤ことができる。

鉄道により右岸駅に到着した皇帝一行を出迎えたのは、県知事、上級官僚、市長、助役ならびに市議会である。一等車乗客用待合室を改装した来賓の間において、セレモニーが始まる。まず助役のニオンが市門の鍵を皇帝に手渡し、市長が演説を行った。彼はこの鍵がかつてナポレオン一世に渡されたものであることに触れ、次のように述べた。

われらはこの鍵を偉大な統治者が二回の来訪にさして示してくれた厚意の思い出として、とりわけ巨大な石橋の建設を命じた法令の思い出として、丁重に保管してまいりました。ルーアン市は数世紀の間、橋が破損したままであることを遺憾に思っておりましたが、この石橋はそれにとって代わったのです。

われらはまた皇帝陛下からも、畏くも関心をお寄せいただいている貴重な証を受け取ってまいりました。我々は素晴らしい数々の街路を建設するにあたり、あなたの寛大な協力を賜りました。この街路は「中略 ジャンヌ・ダルクらがかつて苦しんだ」ドン・ジョンのたもとにおられる陛下を、われらが街のより歴史的で、清潔かつ美しく、大きな広場を有した界限へとお導きいたします。またわれらが父祖の仕事と趣向を残し光を浴びているモニュメントへ、さらにまた大規模な流通に相應しい道路「皇妃通り」によって、今や鉄道に直結した港へとお導きいたします。われらの商工業はいつそうあなたに負っているのです。

これを受けた皇帝の演説後、行列が組織され、皇妃通り北端に設けられた凱旋門を抜けて、市民の歓迎のなか大聖堂へ到着する。そこでテ・デウム斉唱式が行われた後、行列は皇帝騎馬像へ向かった。ここで一行は園芸会を展覧した後、帝国通りを南下し、二つ目の凱旋門（市民の寄付による）をくぐって、ナポレオン三世通りを東進する。さらにブルヴァールを経てナポレオン河岸に至り、石橋を渡ってフォーブール・サン・スヴェールのグラン・クールに着く。ここで、競馬と

園芸会の展覧、歓迎セレモニーとレジオン・ドヌール勲章授与式が行われ、皇帝一行はそのままルーアン左岸駅から出発していった（図1）。滞在は三時間半であった。

今回の来訪は、訪れた日付からナポレオン三世がおじの一〇年のノルマンディー巡幸を意識していたことは明らかだが、ルーアン市長もまた、鍵の授与や都市発展の端緒となった石橋などナポレオンゆかりのエピソードに触れたあとで、三世の恩寵による都市改造と商工業の発展に感謝する旨の演説を行なっている。さらにその後の行列のコースは、皇妃通り、ソルフェリーノ公園、大聖堂、皇帝騎馬像、ナポレオン三世通り、ナポレオン河岸そしてフォーブール・サン・スヴエールというように、軒並み第二帝政期に完成した通りと、ナポレオン一世の「記憶の場」を経由していた。前年来、一段と不況が深刻化していたルーアン市にとって六八年の訪問も、都市の繁栄、発展と皇帝の記憶を強く結びつけ、政府からいっそうの厚情を引き出す機会であつたのであろう。一方、おじの騎馬像を目の当たりにしたはずのナポレオン三世は、市民のメッセージをどれほど理解したであろうか。

とはいえ政策転換が見られない皇帝から、ルーアン市民は徐々に離反してゆく。一八五七年の選挙において三分の一の票を集めた左派勢力は、六三年に四三％を得て、六九年にはついに右派勢力と拮抗するまでにいたつた。そして七〇年五月八日に行われた帝政改革の賛否に関する国民投票において、ルーアンではわずかの差ながら「反対」が過半数を占めたのである。^⑥ それゆえ九月、帝政が崩壊すると、市民は街から第二帝政の痕跡を消してゆく。「帝国」「皇妃」「ナポレオン三世」「ナポレオン」の街路・河岸名は即座に改称された。^⑦ 当然、皇帝騎馬像も共和派の怨嗟の対象となつた。八二年二月三日、市議会において一議員はこう提案したのである。「第一共和政の破壊者、ブリュメール一八日の裏切り者、ナポレオン一世の像は政治的観点からして不健全で好ましくなく、交通の面から言っても有害で危険である」^⑧。ある者は、騎馬像を取り壊し、そのブロンズを再利用（再々利用）して共和国像を建てることを求めた。皇帝像のみを破壊し、政治的メッセージを何ら表明しないように馬像だけ置くことを提案する議員もいた。^⑨ しかし穏健共和派のリカール市長は、これ

について継続審議とし、騎馬像はそのまま立ち続けたのである。

そのうち騎馬像は意外な形で市の風景になじんでゆく。七〇年代の終わりから、市内外で発行されるガイドブックに騎馬像が主要名所として現れるようになったのである。ガイドブックは観光客にその空間の鑑賞方法を教示するものだが、^⑭騎馬像をどのように見るべきと伝えているだろうか。数多い紹介の中から、典型例を示そう。

広場はその中央のナポレオン一世の騎馬像で飾られている。作成者はデュブレ。ブロンズはアウステルリッツで獲得した大砲のそれで、台座にはフォールブル・サン・スヴェールの工場を訪ねたさい、ルーアンの最も年長の労働者にボナバルトが施しを与える様子を描いている（写真つき）。^⑮

また一九世紀末に出されたガイドには、審美的評価とともに、皇帝人気の復活を示す次のような記述もある。

市役所広場には一八六五年に建てられ、除幕されたナポレオン一世の像がある。高さは五メートル一五センチ、騎馬姿の皇帝は右手に帽子を持ち目礼している。「中略」多くの旅行者は主題のディテールにこだわった芸術家の精神を省みないが、皇帝がもつ帽子が被るには小さすぎることから、それ自体が非常に芸術的な作品であることは理解できる。いずれにしろナポレオンはいまだに人気があり、夕方、像のたもとには、主要な通りを警邏してきた軍人たちが帰営するため出発する様子を見に、子供たちが集まってくる（挿絵つき）。^⑯

こうしてナポレオンとルーアンとの関わりは、観光を通じて市内外に認知されてゆく。そして二〇世紀初頭から現在に至るまで、市庁舎を背景にした騎馬像は、市内各所で売られる絵葉書の定番の図柄になっている。街角に並ぶありふれた土産物の、百年來変わらないモチーフ。しかしこうした些細なことが集合心性の形成に影響を及ぼし、おそらくは市民に騎馬像の意味を逆認知させていったであろう。

① *Journal de Rouen*, 16 et 17 août 1865.

② セント＝ヘレナ・メダルとは、一八五七年八月二日にナポレオン

三世によって創設されたメダルである。革命および第一帝政期のフラ

ンス軍人に授与される。国籍を問わないため、フランス人以外の退役兵にも受領資格があった。五七年の時点での生存していた退役兵は三九万人に及んだ。このメダルとナポレオン伝説との関係は、9

Hazareesingh, "La légende napoléonienne sous le Second empire: les médailles de Sainte-Hélène et la fête du 15 août", *Revue Historique*, 627, pp. 543-566.

③ J.-P. Chaline, "1800-1914: transformations urbaines", in: M. Mol-let (dir.), *Histoire de Rouen*, Toulouse, 1979, pp. 337-338.

④ Chaline, "Les monuments du souvenir napoléonien en Normandie", p. 100.

⑤ 以下「サンギニーなぐに開くじは」 *Journal de Rouen*, 1 et 2 juin, 1868.

⑥ J.-P. Chaline, "1800-1914: une ville à dominante bourgeoise" in: *Histoire de Rouen*, pp. 370-371.

⑦ Penaux, *Dictionnaire des rues et places de Rouen*, pp. 328, 405, 432.

おわりに

以上、ルーアンにおけるナポレオン・ボナパルトの「記憶」と皇帝騎馬像の関わりを述べてきた。今一度整理してみよう。

ルーアンにおけるナポレオン伝説はパリにおける事例とはやや異なり、激しい毀譽褒貶にさらされたわけではない。むしろ段階的に定着していった感さえある。一八〇二年の来訪に始まる戦勝と平和、経済繁栄のイメージは帝政末期までルーアン市民の心をとらえた。確かに帝政末期に人心は離反したが、それはボナパルトの全てが否定されたのではない。否定されたのは、スペイン戦争以後平和と経済繁栄をもたらさず、徴兵の重荷を負わせるボナパルトであったのである。だからこそ日和を見ることが長けた商人たちが皇帝を見捨てたとしても、市民の間からその人気が一掃されることは無かった。そして四〇年の遺骸の帰還にさいしては未曾有の歓迎振りが示され、ナポレオン崇拜は突如クライマックスに達し

522. ヘルフェリーノの名がヘルドル（市長名）に変更される。現在各名称が残るのはギリアン通りのみである。

⑧ Chaline, *Napoleon et Rouen*, p. 1.

⑨ L. Vadelorge, *Les statues de Rouen XIXe-XXe siècles*, Rouen, 1999, p. 12.

⑩ アンダン・ロッシェ「ヴァカンスと自然来訪」アラン・コルバン 渡辺響子訳「ナジヤの誕生」藤原書店 二〇〇〇年 一一九—一二三頁。

⑪ *Guide Joanne: Rouen et ses environs*, Paris, 1904, pp. 31-32.

⑫ J. Gireud, *Les excursions normandes: Rouen et ses monuments*, Rouen, 1899, pp. 44-45.

たのである。それはまさしく黄金伝説の復活であった。一方で、ナポレオンの石橋建設命令は一連の都市改造を促し、その過程でルーアンの発展の礎を築いたナポレオンという「記憶」がさらに強化されていった。

六五年、都市改造の中心でもあった市役所広場に建てられた騎馬像は、こうした「記憶」が最も鮮明に実体化したものであった。しかしレリーフの選択、除幕式のバルベの演説内容を考えるなら、それにはおそらく対外戦争に備えてナポレオン伝説を利用した国民統合のベクトルと、経済保護に奔走してくれたナポレオン一世のような施政、すなわち自由帝政の見直しを迫るルーアン名士層の意思表明というローカルなベクトルのせめぎ合いが表象されていたのである。そしてこのナポレオン一世に託して皇帝にメッセージュを送る手法が六八年の三世来訪のさいにも繰り返されたことは、ナポレオンの来訪が六〇年余の長きにわたって、集合的記憶に作用したことを示している。その後騎馬像は第三共和政下で取り壊しが議論されながらも、観光名所としてルーアンの風景に溶け込んでゆき、その存在が市内外に認知されていたのである。

では第三共和政下、ボナパルト家の記憶が軒並み消されてゆく中で、なぜ騎馬像だけは残ったのであろうか。これについて現在のところ筆者は十分に論じる材料をもっていない。それでも展望として付言するなら、騎馬像の材質がアウステルリッツの大砲であったこと、普仏戦争の敗北後、ルーアンが七一年七月までプロイセン（ドイツ帝国）軍の占領下に置かれたことに注目したい。前章で触れた騎馬像撤去案のなかでも、第二案と第三案は、騎馬像の材質を利用することに変わりなく、「アウステルリッツ」の記憶は残されるのである。また市民の反プロイセン感情は根強く、ルーアンに長く暮らしたモーパーッサンの出世作「脂肪の塊」や「二九号の寝台」では象徴的にその顔をのぞかせる。そして「脂肪の塊」における、ルーアンの一娼婦の次のような言葉には、人々の偽らざる心性の一側面が描写されていないだろうか。共和派の革命家の演説口調に、彼女はこう言い放つ。「ああ、そうだったわ！ あの方（ナポレオン三世）を没落させたのは、あなた方のような人たちじゃないの！ あなた方のようなぐうたらが、上に立った日にゃ、フランスを逃げ出すよりほかはありませんよだ！」^①ルーアン市民にとって、大陸を征服しプロイセンを幾度も打ち破ったナポレオン一世の像は、今度は対

独復讐のシンボルとして受容されたものではなかったか。とはいえ以後の体制による政治利用の分析については——ナチス占領下においても廃棄、供出を免れたことや騎馬像が置かれた広場が戦後「シャルル・ドゴール」広場に改称されたことを含めて——他日を期したい。

また集合的記憶にかんしては、記憶の対抗といった面も考える必要がある。現在ルーアン観光でスポットを浴びる人物は、ナポレオン一世ではなく、ジャンヌ・ダルクである。ナポレオンの騎馬像を見ぬ観光客はあっても、旧市場広場に据えられた殉教するジャンヌ像を訪れない人は少ない。さらに「皇妃」通りが一八七〇年九月二五日に「ジャンヌ・ダルク」通りに改称されたことは、どのような記憶の選択があったのだろうか。

あわせてナポレオンやナポレオン三世の巡幸、第二帝政下ルーアンの国民祭典にかんする実証研究も重要なテーマである。しかしいずれの問題も、本稿では扱いきれなかった地方政治史研究を平行して進める必要があるだろう。

① モーパッサン、青柳瑞穂訳「脂肪の塊」「脂肪の塊・テリエ館」新

潮文庫、一九五一年、二三頁。

（名古屋外国語大学准教授）

article. An investigation of the contents of these inscriptions led to the following conclusions.

1. In the Seljuqid periods, sovereigns used the titles *sultan* and *shahanshah*, which means “king of the kings” in Persian, in their inscriptions. The Seljuq sultans in Anatolia also made use of the expressions like *nasir* (assistant), *qasim* (partner), or *burhan* (proof) of “*amir al-Mu’minin* (the commander-in-chief of the believers). The use of these expressions makes clear the importance of the Abbasid Khalifate in the Seljuq dynasty of Anatolia. After the Mongol attacks on Baghdad and the downfall of the Abbasid Khalifate in the middle of the 13th century, such expressions cease to appear in the inscriptions.

2. In the first half of the 14th century, the sovereigns of the local Beyliks preferred to use the title of *al-amir al-kabir* (great amir) in place of sultan of the Seljuq periods. Except for a few examples from the Mongol (the Il-Khan) sovereigns, such as Uljaitu and Abu Sa’id, the local sovereigns in Anatolia, including the early Ottomans, did not use the title of sultan in their monumental inscriptions. But during the second half of the same century, there appear examples of the title sultan being used in some inscriptions. It is worth noting that the use of the title *khaqan* appears in some inscriptions from the reign of Murad I, the third sovereign of the Ottoman dynasty. The reason why the Ottoman sovereigns were titled *khaqan* is not clear. In comparison with the Seljuq period, the use of *laqab*, like Ghiyath al-Dunya wa al-Din, for the sovereigns became less restricted among the early Ottomans.

3. From the reign of Muhammad I, the Ottoman sovereigns made use of the two titles, *sultan* and *khaqan* together in their inscriptions. The famous conqueror of Istanbul, Muhammad II (Fatih), called himself “*sultan al-barrayn*” (sultan of the two lands) *khaqan al-bahrayn* (*khaqan* of the two seas) in the inscription of Bab-i Humayun in Istanbul. These dual expressions became the official titles of the Ottoman sovereigns after Muhammad the Conqueror.

Un essai sur la *mémoire* de Napoléon

par

TAKENAKA Koji

Dans l’étude de la légende napoléonienne, il y a peu de travaux de recherches

sur ce qu'il s'est passé dans les villes de province. Comment une ville de province a vécu cette légende? Pour traiter ce sujet, nous avons pris l'exemple de la ville de Rouen, et en particulier, la *mémoire* civique que symbolise la statue équestre de Napoléon Ier, place de l'Hôtel de Ville.

Napoléon est allé deux fois à Rouen, en 1802 et en 1810. Les Rouennais se souviennent de lui comme d'un héros qui apporte la victoire, la paix, ce qui a entraîné la prospérité économique. Cette popularité n'a pas disparu avec l'effondrement du Premier Empire. Après tout, le retours des cendres en 1840 a activé *la légende dorée*, bien plus que l'urbanisation de Rouen qui a été commencée par Napoléon et qui a renforcé la légende.

Dans un tel élan, la statue équestre a été construite en 1865. Pour le gouvernement, cela montrait sa volonté de unifier la nation, mais pour les citoyens, surtout les notables, qui souffraient de la recession économique, c'était un hommage à Napoléon Ier, aussi une façon d'exprimer leur désir de changement de politique. Ils préféraient le protectionnisme comme pris par Napoléon à libéralisme par son neveu. Et son appel, en 1868, sous l'influence de la légende napoléonienne, montre que soixante ans après, la venue de Napoléon à Rouen agissait toujours sur la mémoire collective.

State Funeral of Lord Nelson: Naval and Military Commemoration in St Paul's Cathedral

by

NAKAMURA Takeshi

St Paul's Cathedral, the cathedral church of the diocese of London and the architectural masterpiece by Sir Christopher Wren, became the most important site of royal and military state commemoration in the period of the French Revolution and Napoleonic Wars. This article argues a series of rituals and projects to commemorate Admiral Horatio Lord Nelson and British naval victory at the Battle of Trafalgar in this metropolitan cathedral in 1805-6. With the emphasis on a spatial dimension of commemoration of the departed hero, this article aims to improve our understandings about the meaning of monument.

In modern Britain, state funeral had been a rare public occasion except for the